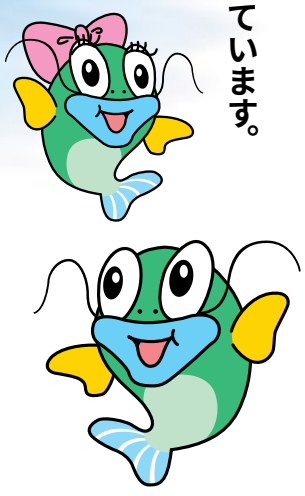
水が支える暮らしと産業

琵琶湖・淀川は滋賀県や京阪神地区のたくさんの人々に飲み水を送り、田畑や工場に欠かせない水源としても、なくてはならない役割を果たしています。今回のルポは流域の方たちの「水」への思いを、お聞きしました。



水があっての工場なんです

宇治川流域の、ある大手企業の工場では川の水を直接、浄水場に取り入れ、機械などの冷却用、飲料用などに用いています。昭和34年からは建設省から取水権を得て、1日当たり最大16万5千m^{3}の取水を実施。その工場をおうかがいし、直接取水の苦労話をお聞きしました。

「平成6年の渇水の時はいろいろ苦労しました。夜中に『工場が停止する』と電話がかかってきたんですね。飛び起きて見に行くと、川の水位がぐんと下がって、取水口に水が来ない。みんなで川に入り、水の流れを変えるために中洲の石を一生懸命運びました。必死でしたね。なんといっても、水があっての工場ですから」

この時の教訓は記録にして大事に残しておられるそうです。

「流域の産業を支える水がいつも充分に使えるようになってほしいですね。琵琶湖の水は必ずしも充分にあるとはいえません。みんなで大事にしなければなりませんね」

琵琶湖の水を利用する人々みんなが共通の意識をもって、さまざまな問題に対処していかなければならないと、あらためて感じました。

（取材：ビワズ通信編集部）

琵琶湖と淀川に感謝しています

神戸市水道局総務部
庶務課主査
井戸修一さん

経営管理課企画係
亀野弘文さん

井戸　神戸の水道の給水能力は現在、89万4千m^{3}で、将来的には需要増大のペースに合わせて107万m^{3}まで確保するめどをたてています。実はその約4分の3は琵琶湖、淀川から来ているんですね。阪神地域は地形的に水資源に恵まれないため、神戸、芦屋、西宮、尼崎の4市でつくった阪神水道企業団をとおして、昭和17年から琵琶湖、淀川から受水しています。六甲山の中を通って神戸の西端まで続く2本のトンネルが、その水を運ぶ大切な経路になっています。神戸市内にも千苅の貯水池をはじめ水源を確保していますが、やはり琵琶湖、淀川の存在が心強いですね。

亀野　昭和30年代までは、まだ渇水による給水制限があったようです。その頃から経済も高度成長期に入り、水の需要は増す一方でしたが、47年から琵琶湖総合開発がはじまり、水不足は改善されていきました。平成6年の渇水では琵琶湖の水位がかなり下がりましたが、当時はすでに琵琶湖開発事業が完了し、充分な水源が確保されていたので、神戸では給水制限を行わずにすみました。生活への大きな影響はなかったと思います。

井戸　たくさんの方に節水に協力していただきましたね。その後は震災による断水を体験し、水の大切さをあらためて痛感しました。現在は施設の耐震化や新たな大容量の送水管の建設など、より安定した給水を行うための対策を進めています。

亀野　平成6年の渇水では、多くの地域では給水制限を行うといった全国的な異常渇水でしたが、神戸は大丈夫でした。琵琶湖、淀川の偉大さには感謝しています。

数字に見る 4年夏 記録的な渇水を節水で乗り切りました

1994年8月から9月にかけて、大阪市水道局では異常渇水のため第1次取水制限（10%）、第2次取水制限（15%）、第3次取水制限（20%）を実施。同時に市民、事業所などに節水を呼びかけ、制限が一時解除されるまでの間に、8～10万m^3／日の節水効果が得られました。琵琶湖開発事業の完成後で、恵まれた水源が確保されていたのと、短期間で多くの方々に節水意識が浸透した成果が、記録的な渇水を乗り切った原動力でした。

人のからだの約70パーセントが水でできているようにわたしたちの毎日の暮らしも、農業も工業も、水なしでは考えられません。今回の「水のルポ」をとおして、ふだん、なにげなく使っている水が、琵琶湖と淀川から流れてきていることに、あらためて気づきました。

わたしたちの水、これからも大切にしたいですね。

資料提供：大阪市水道局

←前頁へ　次頁へ→